

大学院論文集

第15号



杏林大学大学院国際協力研究科
2018年3月

目 次

王	倩：通訳作業における異文化コミュニケーションによる障壁の実態について — 日中通訳を例に— …………… 1
張	晶：リスク回避の視点から見る中日同時通訳における話速と訳出率の相関性 — 学生への実証研究を中心に— …………… 15
	2016 年秋学期・2017 年春学期国際協力研究科修了者論文題目一覧 …… 34
博士学位論文 内容の要旨および審査結果の要旨	
藤田 由香利	：中国語教育における通訳技術訓練の導入研究 — 日本語母語話者の中国語学習初期における クイックレスポンス導入の効果— …………… 39

通訳作業における異文化コミュニケーションによる障壁の実態について

——日中通訳を例に——

王 倩

要 旨

本論文において、異文化コミュニケーションを一つの視点として、日中通訳を例に、通訳の進行を妨げるような障壁及びその乗り越え方について研究してみた。アンケート調査を実施した結果、異文化コミュニケーション能力は通訳者にとって欠かせない大事な素質の一つであることがわかった。また、通訳者たちの解答から、日中通訳における文化の違いによる障壁を七つの種類にまとめた。

はじめに

1. 研究の動機及び目的

21世紀の今日に至っては、国際交流はもはや珍しいことではなくなっている。グローバル化が進むにつれて、人、カネ、モノ、情報が国境を越えて世界中を行き交うようになった。仕事や日常生活の中で、文化的背景の異なる人と接するのは避けられなくなったといっても過言ではない。まさに「異文化コミュニケーションの時代」の到来といえよう。

このような状況下で、異なる言語間において意思疎通を図るために必要不可欠な通訳の存在もますます広く知られるようになった。同時に、通訳を研究する人も増えてきている。本論文では、異文化コミュニケーションを一つの視点として、日中通訳を例に、通訳の進行を妨げるような障壁及びその乗り越え方について研究してみた。通訳者が普段ぶつかりやすい難問の解決策を異文化コミュニケーションの視点から探ってみることで、通訳研究の一助となればと願っている。

2. 先行研究

異文化コミュニケーションを通訳と結び付けて研究を行った文献として、近藤正臣の『通訳とはなにか』があげられる。この本の前半では、通訳の原理、本質、現場の仕事などについて紹介するが、後半の部分は主に異文化コミュニケーションの視点から日英通訳者の直面する障壁を説明している。筆者が本論文において中日通訳をテーマに研究を行う際に、この本から多くのヒントをいただいた。また、稲生衣代の『異文化コミュニケーションとしての通訳』（2006）や大崎正瑠の『日中異文化コミュニケーションに向けて（1）』（2001）、水野的の『同時通訳の理論』なども参考にした。

3. 研究対象及び研究方法

本論文は日中通訳でよく見かけるような誤解や難題に焦点をあてる。同時通訳は速い反応が求められるため、誤訳の原因を探るのが少し難しいため、主に逐次通訳について研究する。

具体的な研究方法としては、日本で日英通訳の先行研究を参考にしながら、それと対照的に、日中通訳にも類似の問題があるかどうかを模索する。通訳分野及び異文化コミュニケーションに関する先行研究を踏まえ、仮説を立てる。次に、一定の通訳歴のある通訳者を対象にアンケート調査を行う。そして、その結果について分析する。

4. 本論文の構成

本論文は全部で二つの部分からなっている。

第1章においては、異文化コミュニケーションの定義を紹介し、通訳者の異文化コミュニケーターとしての役割を明確にする。そして、通訳者にとって、異文化コミュ

ニケーション能力は必要不可欠な資質であるということを推測する。

第2章では、仮説を立て、日中通訳者を対象としたアンケート調査を実施し、その結果に基づき、通訳作業における異文化コミュニケーションによる障壁の実態を分析する。

第1章 異文化コミュニケーターとしての通訳

1.1 異文化コミュニケーションと通訳

異文化コミュニケーションは文字通り、「異なる文化的背景をもつ人々の間で行われるコミュニケーション」のことを指す。最初に「異文化コミュニケーション」という用語を作ったのはホール（Edward Twitchell Hall）である。アメリカの文化人類学者であるホールは、「文化とはコミュニケーションであり、コミュニケーションは文化である」と述べている。

ホールは文化と氷山は似ていると提唱し、そして文化の「冰山モデル」を打ち出した。氷山は海面から出ている部分と水面下に隠れている部分がある。しかも水面下に隠れている部分がずっと大きい。文化も同じで、目で見えて確認できるのは文化全体のほんの一部にすぎないのである。これを図で表すと、次のようになる。

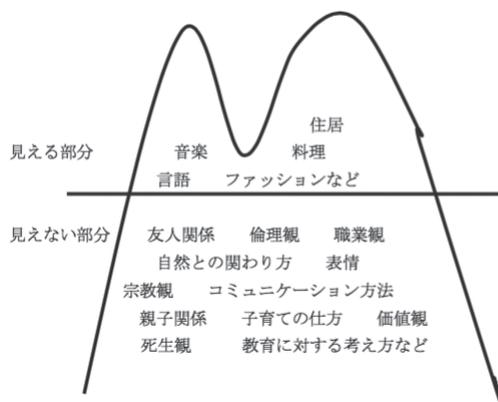


図1-1 文化の冰山モデル¹

図1-1から分かるように、文化の見える部分には音楽、住居、料理、言語、ファッションなど、形のあるものが入っている。そして、目に見えない部分には、友人関係、倫理観、職業観、自然との関わり方、宗教観など、形のないものが入っている。また、目に見えない部分は見える部分より遥かに大きい。即ち、深層文化はけっこう幅広いものなのである。

ここからは文化の二つの特徴がまとめられる。一つは、奥深いことで、もう一つは変容するものである。深さは文化の含みによって違う。また、変容しやすさもいろいろ

1 中村良廣（1997）『異文化コミュニケーションと実践型教育』筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報22号

ると異なってくる。常に異なる文化の間で仲介役を果たす通訳者にとって、両国文化への理解を深めなければならない。それは、単に衣食住など、目に見える文化だけではなく、人々の思考パターンや物事への理解の仕方、さらに価値観など、深いところまで視野を広げなければならないのである。また、文化は変容するものであるため、通訳者に新しいことに対してアンテナを張り、世界の動向を追わねばならないのである。

1.2 異文化コミュニケーション能力について

では、具体的に異文化コミュニケーション能力はどのようなものを指しているのだろうか。一般的にコミュニケーション能力は四つの要素によって構成されていると認識されている。即ち、文法能力、社会言語能力、談話能力、そして方略的能力²である。それぞれの要素の含みは以下のようなものである。

- ①文法能力： 狭い意味での言語能力である。言語の語彙的、形態的、統語的そして音韻的な特徴を認識し、それらの特徴を使って表現や文を形成する能力である。
- ②社会言語能力： 言語が使われている社会的コンテキスト、つまり、参加者の役割、彼らが共有している情報、そしてインタラクションの機能が含まれる。
- ③談話能力： コンテキスト理解能力とも呼ばれ、個々の文章の解釈ではなく、意味のある全体を形成するためにつながった一連の文や発話を扱う。
- ④方略的能力： コミュニケーション能力は相対的なものである。不十分な文法の知識、または言語仕様を制限するような疲労、注意散漫、不注意などの要因を補うために、人々が用いる様々なストラテジーのことである。

コミュニケーション能力のこの四つの要素は異文化コミュニケーション能力においても通用できるかと思われる。ただ、異文化コミュニケーション能力の要素はすべて両文化間という背景を大前提に考えなければならないのである。文法能力が一番基本的なものとされる。即ち、相手の言語の各方面を正確に認識し、それで自己表現できる力である。社会言語能力の含みは相手国の社会的コンテキスト、言い換えれば、相手国の文化の特徴を知り、適切な対応をする能力のことである。談話能力は、異文化の相手の話を個々の単語としてではなく、全体として理解する能力のことである。また最後に、方略的能力は異文化コミュニケーションにおいても極めて重要であろう。コミュニケーションのハードルが高くなったため、さらに様々なストラテジーが求められるのである。

本章においては、異文化コミュニケーションの定義を紹介し、通訳者の異文化コミュニケーション者としての役割を明確にした。そこから、通訳の学習者にとって、異文化コミュニケーション能力は必要不可欠な素質であると推測する。

2 サンドラ・サヴィニョン (2009) 『コミュニケーション能力』法政大学出版社
49 ページ

第2章 日中通訳者を対象としたアンケート調査

では、実際通訳者が通訳する中で、異文化コミュニケーションの意識が存在しているのでしょうか。また、異文化による障壁にぶつかった経験があるか。これまでの論述を踏まえ、通訳における異文化コミュニケーションによる障壁の実態と対処法を知るために、25人の日中通訳者を対象にアンケート調査を行った。

2.1 仮説

一般的に通訳は異言語間コミュニケーションの領域内で行われてるものだと考えられているが、実際の通訳においては、それだけでは対応できず、異文化コミュニケーションの領域内に入っていく必要がある場合もある。故に、本調査の仮説を「文化の違いによる通訳上の障壁がある」とする。

2.2 調査方法

筆者は25名の日中通訳者に業務中に体験した異文化接触について、現状、問題点、解決法等、選択問題と自由回答形式の8項目を質問し、解答のデータを収集・分析した。アンケート調査の質問事項の内容は以下の通りである。

2.3 質問事項

本論文の質問事項は主に三つの面から設計した。一、異文化要素は日中通訳作業に影響すると思うかどうか。二、もし影響すると思う場合、どのように影響するか。三、日中通訳における異文化による障壁をどのようにして乗り越えられてきたか。具体的な質問事項は別紙添付するため、本文においては詳しく紹介しない。

2.4 調査対象のプロフィール

本アンケート調査の調査対象の年齢層は20代後半から40代後半までで、全員4年以上の通訳経験がある。その中、日中通訳を専門とする博士は3名、日中通訳のコースを修了し仕事の中で通訳業務を担当している人は17人、現役の通訳者は3人、そして教育現場で日中通訳を教えている人は2名である。また、対象者の25人中、20人が中国人で、5人が日本人である。(表5-1)

	氏名	性別	年齢	母語	主要分野	通訳経験年数	海外滞在経験
1	A	女	20代	中国語	図書出版	5年	あり
2	B	男	20代	中国語	通信	4年	あり
3	C	女	20代	日本語	国際交流	3年	あり
4	D	女	20代	中国語	銀行	6年	あり
5	E	男	20代	中国語	鉄鋼	6年	あり
6	F	女	20代	中国語	特許	5年	あり
7	G	女	30代	日本語	教育	8年	あり
8	H	女	20代	中国語	エレクトロニクス	4年	あり
9	I	男	40代	中国語	観光	18年	あり
10	G	女	20代	中国語	広告	4年	あり
11	K	男	40代	中国語	観光	17年	あり
12	L	男	30代	中国語	外交	8年	あり
13	M	男	20代	日本語	ビジネス	5年	あり
14	N	男	20代	日本語	ビジネス	4年	あり
15	O	女	20代	中国語	ビジネス	6年	あり

16	P	女	30代	中国語	ビジネス	8年	あり
17	Q	女	20代	中国語	自動車	6年	あり
18	R	女	30代	日本語	教育	10年	あり
19	S	女	20代	中国語	歴史	6年	あり
20	T	男	20代	中国語	ビジネス	5年	あり
21	U	男	30代	中国語	外交	11年	あり
22	V	男	40代	中国語	ビジネス	17年	あり
23	W	女	20代	中国語	ビジネス	5年	あり
24	X	女	20代	中国語	国際交流	5年	あり
25	Y	男	30代	中国語	自動車	8年	あり

表5－1 調査対象のプロフィール（アンケート調査実施順）

2.5 調査結果の分析

本アンケート調査の解答はすべて調査対象が自らの経験に基づいて出したもので、失敗例も成功例も全部通訳者が通訳業務を担当する中の出来事である。

2.5.1 分析1－文化の違いによる障壁の有無について

仮説では、文化の違いが日中通訳に障壁をもたらすと推測している。この障壁は実際存在しているか、また存在した場合通訳の進行をどこまで妨害しているかについて分析した。

(1) 文化の違いは通訳に障壁をもたらす。

質問1「文化の違いは通訳に障壁をもたらすとお考えですか」への解答を円グラフで表したものは次の通りである。（図2－1）

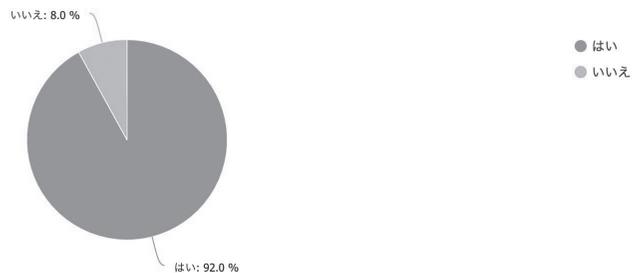


図2－1

この図からも分かるように、「はい」と答えた人は92.0%で、「いいえ」と答えた人は8.0%である。結論として、殆どの人が文化の違いは通訳に障壁をもたらすと考えているといえよう。

(2) 文化の違いは通訳にある程度の障壁をもたらす。

質問2「過去の通訳の経験の中で、文化の違いによる障壁がすべての障壁に示す割合はどのぐらいですか？」への解答を横棒グラフで表したものは次の図2－2の通りである。

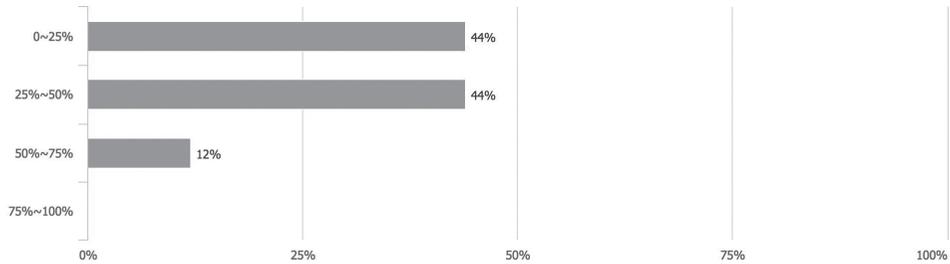


図 2 - 2

この図からも分かるように、「0～25%」と答えた人と「25%～50%」と答えた人は同じく44%を占めており、「50%～75%」と答えた人は12%である。即ち、文化の違いは通訳に少し障壁をもたらすと考える人は半分近くを占めており、文化の違いは通訳に大きな障壁をもたらすと考える人も半分近くを占めており、残り少数の人は文化の違いは通訳に極めて大きな障壁をもたらすと考えているとかがえる。

(3) 多くのクライアントも文化の違いによる通訳への障壁を認識している。

質問5「過去の通訳経験の中で、あなたのクライアントが積極的に相手国の文化を理解しようとする姿勢を示したことがありますか」への解答を横棒グラフで表したものは次の図2-3の通りである。

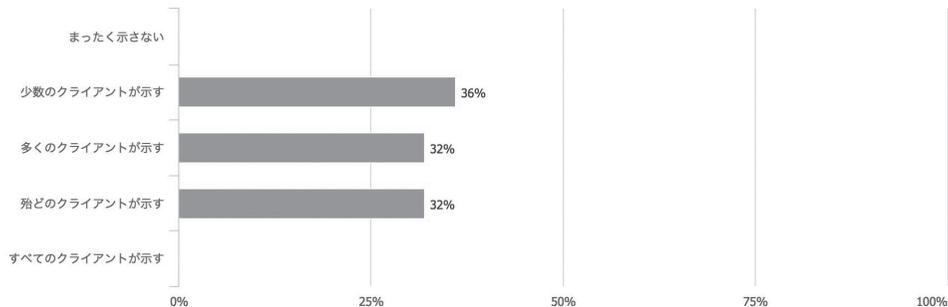


図 2 - 3

この図から分かるように、通訳者の過去の通訳経験の中で、文化の違いは会話の進行に不利であるという認識を持っているクライアントが必ず存在するということがうかがえる。多くのクライアントも文化の違いによる通訳への障壁を認識していると推測される。

2.5.2 分析2-文化の違いによる障壁の種類について

質問6「通訳者が直面する両国間の文化の違いによる障壁はどのようなものがあるとお考えですか？」への解答を横棒グラフで表したものは以下表2-4の通りである。

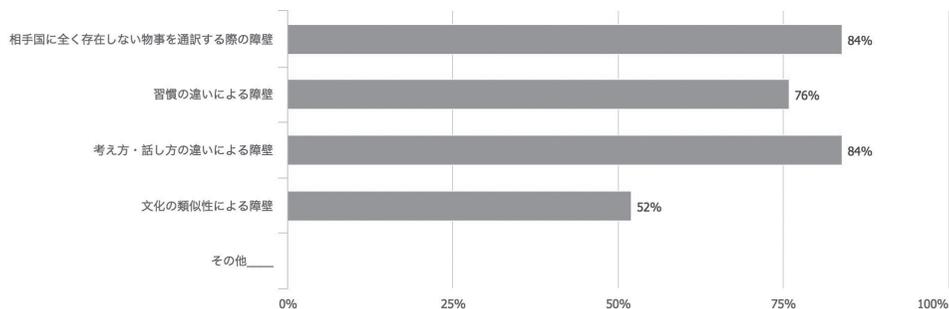


図 2 - 4

このグラフから分かるように、一番多い答えは「相手国に全く存在しない物事を通訳する際の障壁」と「考え方・話し方の違いによる障壁」で、これに次いで「習慣の違いによる障壁」という答えも少なくない。また、「文化の類似性による障壁」を指摘した人はおよそ半分を占めている。このグラフと自由解答形式の質問 3 と 4 の答えをあわせて分析して、文化の違いによる障壁の種類を以下の 7 種類にまとめることができた。

(1) 習慣の違い

やはり一番多く指摘されるのは日中両国の習慣の違いによる障壁である。日中両国は一衣帯水の隣国でありながら、日常生活の中では多くの習慣が違う。これらの違いが分からないと相手国のことも理解しにくいと思われる。

例えば、何人もの回答者が日本の「割り勘」という習慣に言及した。日本では、みんなで食事する時、割り勘が一般的な会計方法であるが、中国では奢ったり奢られたりするのが普通である。これは日本人の「他人に迷惑をかけない」と中国人の「朋有り遠方より来たるまた楽しからずや」という文化に由来したと思われる。事前に中国側に日本の「割り勘」習慣を説明したら中国側の理解を得て商談もスムーズに進んだ経験を書いた人がいる。

(2) 考え方・話し方の違い

解答の中で、二番目に多いのは「考え方・話し方の違い」による障壁である。日中両国の人は考え方や話し方で多くの違いがある。同じことを考えていても、表現の仕方が違うため、違う意味が伝わってしまう場合もある。また、同じ言い方をしているながら、違うように受け止められて、会話が難航に陥ってしまうケースもある。

例えば、解答の中にこのような事例があげられた。通訳者が中国のある市の特許事務所とともに日本の企業を訪問した。中国側は何回も自分たちの事務所は政府の管轄下にあると強調して代理権を得ようと努力したが、結局失敗した。後になって分かったが、中国の人から見れば、政府の管轄下にあるというのは正当性があり、信頼度の高いことの象徴であるが、それを日本人から見れば逆に優越感があり責任感が薄い印象を受けてしまうという。そのため、事前に日中双方のこのような認識・考え方の違

いに気づけば、通訳もより正確に双方の意思を伝えることができたのかと思われる。

話し方の違いについては、ある通訳者の解答では、日本人は論点を述べる時、曖昧で遠回しな言い方を好み、最後に論点を言う傾向がある。一方、中国人はわりとストレートな話し方を好み、最初に論点を述べ、次からこの論点について詳しく展開する傾向がある。そのため、自分が通訳を担当した際に、中国側が内容をよりよく理解できるように、日本側の論述を聞いて通訳する時、論点を最初に言って、それから論拠を述べるという話し方を選んだ。

(3) 文学用語

通訳の際、特に同時通訳の際、文学分野の言葉を如何に訳すかは極めて大きな難問と言っても過言ではない。特に中国の古典の中、唐詩・宋詞などがよく引用される。また、成語、俗語、比喩語、洒落言葉なども高い頻度で使われているのが現状である。これらの言葉や詩句は、本来の意味や現代語による説明の仕方を知らないと通訳の時障壁にぶつかってしまうことになるかと推測できよう。

(4) 歴史用語

歴史上の出来事や人物を知らないため通訳で失敗した事例も多くあげられている。例えば、ある回答者によると、かつて日本語を中国語に訳すとき、「織田信長」や「関ヶ原の戦い」など、日本では普通に引用されている言葉であるが、当時はまだ何も知らずに、ごまかすしかないという。

(5) 社会用語

社会現象を知らなかったため通訳で失敗した事例もあげられている。日本のいじめ問題、時短制度、過労死、高齢化、年金、就活等、そして中国の西部大開発、医療保険、不動産の価格高騰問題、出稼ぎ労働者の賃金問題、一路一帯政策、税金調整等、両国社会にはそれぞれの現象や問題がある。また、今一番流行っている言葉、即ち流行語もリアルタイムに更新しなければ通訳に際して障壁にぶつかりがちと考えられる。

(6) 類似語（特に漢語）

日本語には多くの漢字がある。これらの漢字は昔中国から伝わってきたものもあれば、日本人が自ら作った漢語もある。そのため、中国語と日本語の中には多くの類似語がある。もちろん、漢字も意味もまったく同じ単語も多く存在しているが、漢字が同じであるが、意味やニュアンスが異なる単語も少なくない。日中通訳において、これらの類似語がよく混乱を起こしてしまうという。

(7) 言葉遣いと上下関係

日本語には多くの敬語がある。場面や当事者の身分によって使う敬語も異なってくるのである。例えば、「です・ます」は一応相手への尊敬を込めて使う言葉ではあるが、自分より身分の高い人に対しては、単なる「です・ます」では失礼と思われてしまう場合もある。そのため、日本の上下関係による言葉選びも通訳者にとって大きな障壁になるといえよう。また、敬語だけではなく、上下関係によっては訳してはいけない

場合もある。例えば、解答の中にこのような事例があげられている。中国側の人が「あなたすごいですね。こんな年でこんなに元気でいらっしゃるなんて」というようなことを言った。通訳者がそのまま通訳したら、向こうが不機嫌な顔をしたという。中国では、一般にお年寄りには尊敬される対象と考えられているため、高齢という言葉にあまり抵抗感がないが、日本では、直接相手は年をとっていることがいえないのである。この通訳者もその文化の違いを知らないため通訳で失敗したといえよう。

終わりに

本論文において、異文化コミュニケーションを一つの視点として、日中通訳を例に、通訳の進行を妨げるような障壁及びその乗り越え方について研究してみた。具体的に、通訳関係者 25 人を対象としたアンケート調査の内容を紹介し、その結果に基づき、通訳作業における異文化コミュニケーションによる障壁の実態を分析した。アンケート調査の結果からは、異文化コミュニケーション能力は通訳者にとって欠かせない大事な素質の一つであることがわかった。また、通訳者たちの解答から、日中通訳における文化の違いによる障壁を習慣の違い、考え方の違い、文学用語、歴史用語、社会用語、類似語、言葉遣いと上下関係この七つの種類にまとめた。

もちろん、本研究の最終的な目的はこれにとどまらない。一番大きな課題は、これらの障壁の乗り越え方をみつけ、これから通訳学習者の異文化コミュニケーション能力の育成に応用することである。これについては、紙幅に限りがあるため、また別紙にて研究していく所存である。

【謝辞】

本論文では、日中通訳者を対象としたアンケート調査を行う段階で、日中通訳を専門とする 3 人の博士、日中通訳のコースを修了し仕事の中で通訳業務を担当している 17 人、3 人の現役通訳者、そして教育現場で日中通訳を教えている 2 人、各業界から合わせて 20 人の方々にご多忙の中、時間を割いてアンケートに記入し、貴重な通訳経験を提供していただき、多大なるご協力を賜りましたことに深く感謝しています。アンケートから収集した情報は本論文の貴重な裏付けとなっており、肝心の礎ともいえましょう。論文の最後である程度の結論を出せたのは皆様のご理解とご協力の賜物です。ここにて、心から感謝の意を申し上げます。

最後に、本論文の構想から仕上げまで、長年にわたりご指導・ご鞭撻をいただいた杏林大学の塚本慶一教授、塚本尋教授には、ご専門の日中通訳というお立場から、的確かつ貴重なご助言を賜りましたことに御礼申し上げます。本論文はここまでまとめあげられたのは、尊敬するお二人の先生のご支持と励ましのお言葉があったからだと思っています。ここにて、深い感謝の意を表して謝辞といたします。

参考文献

- 古田暁監修 石井敏・岡部朗一・米昭元著（1987）『異文化コミュニケーション』有斐閣
- 中村良廣（1997）『異文化コミュニケーションと実践型教育』筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報 22 号
- 永田小絵（1999）『通訳とはいかなる作業か—異言語間コミュニケーション・ツールとして』未公開資料
- 大崎正瑠(2001)『日中異文化コミュニケーションに向けて(1)』『コミュニケーション科学』NO.14『異文化コミュニケーション能力育成に向けた異文化理解教育の実践と英語学習への展開』
- 稲生衣代（2006）『異文化コミュニケーションとしての通訳』津田塾大学紀要 NO.38
- 椎名佳代・平高史也（2006）『異文化間コミュニケーションにおける通訳者の役割—日本語・英語の場合—』総合政策学ワーキングペーパーシリーズ NO.86
- 八代京子・町恵理子・小池浩子・吉田友子（2009）『異文化トレーニング—ボーダレス社会を生きる』三修社
- サンドラ・サヴィニョン（2009）『コミュニケーション能力』法政大学出版社
- 池田理知子（2010）『よく分かる異文化コミュニケーション』ミネルヴァ書房
- 石井敏・久米昭元・長谷川典子・櫻木俊行・石黒武人（2013）『初めて学ぶ異文化コミュニケーション—多文化共生と平和構築に向けて』有斐閣
- 中村良廣（2014）『異文化コミュニケーション入門ワークブック』松柏社
- 近藤正臣（2015）『通訳とはなにか』生活書院
- 水野的（2015）『同時通訳の理論』朝日出版社
- 山本登志哉（2015）『文化とは何か、どこにあるのか』新曜社
- 武田珂代子（2017）『翻訳通訳研究の新地平』晃洋書房

付録

通訳における文化の違いによる障壁に関するアンケート調査 ーベテラン日中通訳者を対象にー

この度は本アンケート調査に応じてくださって誠にありがとうございます。博士論文の調査研究の一環として、通訳経験豊富なあなたに対して以下のアンケート調査を行います。出来る限り、ご自身の経験に基づいてお答えください。よろしくお願いいたします。

1、文化の違いは通訳に障壁をもたらすと思いますか？

「いいえ」と答えた場合、次からの質問に答える必要はありません。

- はい
- いいえ

2、過去の通訳の経験の中で、文化の違いによる障壁がすべての障壁に示す割合はどのぐらいですか？

- 0～25%
- 25～50%
- 50～75%
- 75～100%

3、過去の通訳経験の中で、異文化理解の不足による通訳の失敗例がありますか？（複数解答可）

4、過去の通訳経験の中で、中日両国の文化の違いを知ることで双方の相互理解を促進した経験がありますか？（複数解答可）

5、過去の通訳経験の中で、あなたのクライアントが積極的に相手国の文化を理解しようとする姿勢を示したことがありますか？

- まったく示さない
- 少数のクライアントが示す
- 多くのクライアントが示す
- 殆どのクライアントが示す
- すべてのクライアントが示す

6、通訳者が直面する両国間の文化の違いによる障壁はどのようなものがあるとお考えですか？ [多肢選択問題]

- 相手国に全く存在しない物事を通訳する際の障壁
- 習慣の違いによる障壁
- 考え方・話し方の違いによる障壁
- 文化の類似性による障壁
- その他

リスク回避の視点から見る中日同時通訳に おける話速と訳出率の相関性 ——学生への実証研究を中心に——

張 晶

要 旨

本稿は学生が同時通訳における話速の変動を前に、どのような傾向があるのかを考察するためにアンケート調査と同時通訳の実験を行い、量的研究と質的研究によって、次の結論を得ることができた。①学生が知覚した話速と実際の話速と一致しない場合がある；②学生がかなりの程度で自分の訳出率を予測することができる；③話速が比較的遅い場合に、学生が重要情報を訳すように努力するが、話速が上昇すると、とりあえず聞き取れた情報を訳すという方略を使い、情報選別の余裕がなくなってしまう。④原稿付きより、即興発話の場合は訳しやすく、予測の正確率が高い。

1. はじめに

同時通訳における話者の話速と通訳者の訳出率の関係について、これまで数多くの研究者が検証や議論に携わり、話速が速すぎると通訳者の訳出率が低下するとの結論でほぼ一致を得た (Gervert.1969/2002, フランツ・ポエヒハッカー .2004, 楊承淑 .2004, 川端谷津子 .2014 など)。しかし、その結論はあくまでもぼんやりしたものにとどまり、踏み込んだ研究が少ないというのも事実なのである。周知のように、話速は同時通訳において、極めて重要な影響要因である。しかし、訳質にとって重要な影響要因だとわかっているからこそ、逆にそれを当たり前のように思い、一歩進んだ研究を軽視する危険性を孕んだのであろう。よって、本稿は通訳課程を受けている学生を視野に入れ、アンケート調査、量的研究と質的分析を通じて、学生が話速というリスク¹に直面した時に、どのような方略を取るのか、そして、話速というリスクをどのように認識するのか、を究明したいと思う。

2. 研究材料の選定

2.1 話者原稿付き発話—通訳者即興通訳 (出自 :2017CCTV 大富)

話者	話速	テーマ
話者 A	遅い	1 北朝鮮ミサイル発射
話者 B	速い	1 北朝鮮ミサイル発射
話者 C	やや速い	1 北朝鮮ミサイル発射
話者 D	速い	2 第十二期全人代第五回会議
話者 E	とても遅い	3 中国の伝統文化を世界が見る
話者 F	遅い	4 韓国サードの配備
話者 G	速い	4 韓国サードの配備
話者 H	遅い	5 中国の文化進出
話者 I	速い	5 中国の文化進出
話者 J	速い	6 日本新型護衛艦の配備
話者 K	遅い	7 習近平主席主催のメディア座談会

表 1

2.2 話者即興発話—通訳者即興通訳 (出自 :2013 フェニックステレビ時事弁論番組)

話者	話速	テーマ
話者 L	遅い	中日釣魚島問題
話者 M	速い	中日釣魚島問題
話者 N	やや速い	中日釣魚島問題

表 2

3. 実験対象者の選定

話者原稿付きの場合は、現在大学院で通訳のトレーニングを受けている全員、つまり 10 名の学生を、まだ正式な訓練が始まっていない一年生とすでに一年間訓練を受けていた二年生に分けて、全く同じ材料を訳してもらったが、二年生 5 名の訳だけ

1 リスクとは目的に対する不確かさの影響のことを言い、話速のリスクというのは話速、とりわけ速い話速が通訳者の訳出率にもたらした影響を言う。

を書き起こした。

通訳者	テーマ
学生 1	1 北朝鮮ミサイル発射
学生 2	2 第十二期全人代第五回会議
学生 2	3 中国の伝統文化を世界が見る
学生 3	4 韓国サードの配備
学生 4	5 中国の文化進出
学生 5	6 日本新型護衛艦の配備
学生 5	7 習近平主席主催のメディア座談会

表 3

そして、話者即興発話の場合も、院生 10 名を二組に分けて全く同じ材料を訳してもらい、二年生 5 名の訳だけを回収した。

通訳者	テーマ
学生 1～5	中日釣魚島問題

表 4

4. 事前準備

4.1 専門用語とテーマの事前告知

実験を行う前に、学生にとって難しそうな専門用語をピックアップし、被験者に渡して予習してもらった。というのは、本稿は専門用語に引っかかった訳出を研究対象から除外しているので、もしそれが原因で、全体の訳出率に影響を及ぼしたら、データが汚染されてしまう恐れがあるからである。

また、テーマを学生に事前に伝え、一定の背景知識を持つように準備してもらうことにした。

4.2 自己評価するためのアンケート作成

上述の事前準備はすべて話速以外の変数に対し、学生の通訳環境を同一条件にコントロールするために行ったわけであるが、それ以外にも、被験者が実験直後に自己評価できるようにするためのアンケートを作成してみた。

4.2.1 目的

同時通訳は従来からブラックボックスのような作業だと言われており、それを行う最中に、通訳者の脳内に実際何が起きているのかを目で観察するのは難しいからである。よって、これまでそれを少しでも明らかにしようとするために、大まかにいうと、3つの研究パターンが使用されてきた。

一つ目は、談話理解や、訳出に基づいた推察法、もしくは理論研究法であり(セレスコビッチ .1979, 船山 .2012, 石塚 .2008)、二つ目は、通訳者に対するアンケー

ト調査法である (Isham.1994, 張威 .2011)。そして、三つ目は、現代技術を生かし、通訳者が実際に通訳するときには脳の活発領域を機器で解析するような方法である (辰巳 .2013)。

本稿では、研究の目的と条件に沿って方法 2 を選ぶことにした。アンケート調査を通じて主に下記いくつかの点を明らかにしたいと思う。

1) 被験者が実際に聞き取れた情報を全て訳出できたのか。もし、訳出できなかったら、それが話速の上昇による認知資源の過負荷によるか、それとも話速に関係なく、ただ対応した訳語が見つからなかったことに由来するかを確かめたい。

2) 被験者に自己採点をしてもらい、それが後に算出された訳出率とどのような関係を持つのかを調べることにする。

3) 話速は、音節総数を発話時間で割れば算出できるという単純で、絶対性を持つようなものではなく、実はかなり柔軟性のあるものである。もし、話者はイントネーションが単調で、ポーズが短ければ、より速く聞こえるかもしれない。また、情報密度も聞き手の知覚した話速に影響を与える可能性がある。よって、被験者に話者の話速に対する直感を聞く必要性もあるのではないと思われる。

4) 本稿は話速を中心に考察するので、話速が実際に通訳作業に影響を与えたのかを量的研究だけでなく、被験者自身にも直感で判断してもらいたい。

5) 話速が遅い場合と話速が速い場合とは、通訳のプロセスにおいて、被験者が異なった策略を取ったのかを調べることにする。

このように、アンケートで調べたいのは 1) を除けば全て被験者にとって刺激の強い直感的なものである。記憶の無意識的な変容を心配することはそれほどないとは言え、1) に関するデータをできるだけ正確なものにするために、やはり調査のタイミングを考えなければならない。

4.2.2 アンケート調査実施時点に関する先行研究

これまでの先行文献を見ると、調査実施のタイミングにおいて主に二つのパターンが見られる。一つは実証研究が行われる最中に実施した即時調査法であり、もう一つは実証研究が終了した後に行われた事後調査法である。また、回収した回答の形式から見れば、さらに口頭回答法と書面回答法の二つに分けることができる。

即時調査法を口頭回答法と組み合わせると、発話思考法 (Taps 調査法) という調査法になる。ここの発話思考法というのは、自分の頭に浮かんだことを全てリアルタイムに発話して報告してもらうことで、最初は心理学の研究に使われていたが、20 世紀 80 年代から翻訳する際に、翻訳者の認知メカニズムはどのように働くかを究明するために、翻訳研究にも導入されることになった。これは特に、メタファー、長文や難訳文に遭遇した時の翻訳者の思考回路を知るには有効だと思われる。

一方、事後調査法は書面回答法と口頭回答法との組み合わせもあるが、これは被験

者の実験に対する全体的な印象や、直感的な感想など、記憶の減衰を心配しない項目を調べる際に使われており、かつ両方の効果にはそれほど差がないと思われる。

本稿で調べたい項目は記憶の減衰をできるだけ避けたいものと直感的な感想の両方が含まれているので、調査の形を即時調査と事後調査の二種類を採用することにした。また、上述のように、被験者にできるだけ通訳作業以外の認知的負荷を与えないために、即時調査は一つのまとまったテキストへの通訳が終わった度に行うことにした。さらに、事後想起である以上、明確な設問を選択式に設定すれば、むしろ書面調査の方は口頭より被験者にとって回答しやすいので、書面調査を即時調査と組み合わせて行うことにした。

そして、事後調査は一人の通訳者が全てのテキストを訳し終わった時点で書面回答の形で行うとする。

4.2.3 アンケートの作成項目

前述の研究目的に基づき、アンケートの項目を以下のように設定する。

1) 即時調査 (話者即興と原稿付きの場合に分けて調査)

テーマ:

①先ほど聞いた情報を覚えられる範囲で中国語で要約して下さい。

➡もし、聞き取れたが、訳し方がわからないというような言葉があれば、中国語でその難訳語を書いてください。

②直感で先ほどの訳出に点数をつけてください。

A.50点以下 B.50~60点 C.60~70点 D.70~80点 E.80点以上

③先ほど聞いた発話の話速はどう思いますか？

A.非常に速い B.やや速い C.普通 D.やや遅い E.非常に遅い

2) 事後調査

④話速が自分の訳出に影響を与えたと思いますか？

A.とても影響した B.ある程度影響した C.殆ど影響していない

⑤話速の速いテキストを訳すときに、

A. とりあえず聞いた情報を訳す

B. 訳しやすいような情報を訳す

C. 重要と思われる情報を訳すように努力する

D. その他 ()

⑥話速の遅いテキストを訳すときに、

A. とりあえず聞いた情報を訳す

B. 訳しやすいような情報を訳す

C. 重要と思われる情報を訳すように努力する

D. その他 ()

⑦今回、話速以外の要因（例えば、難易度、体調など）によって訳出率が影響されたと思いますか？

A. とても影響した B. ある程度影響した C. 殆ど影響していない

➡ある場合、それは（ ）

上述の①～③の項目は一つのテキストが訳し終わった直後に被験者に答えてもらうことにするが、④～⑦項目は全体の実験が終了する時に総合評価として書いてもらうことにする。

5. 仮説

実験を行う前に、以下の仮説を立てることにする：

1) 話速に対する学生群の直感が必ずしも実際に測定した話速と一致するとは限らない。話速の差がそれほど大きいものではない場合に、学生の判断が新情報密度に影響されやすいのではないかと思われる。

2) 話者原稿無しの場合と比べると、原稿付きの場合は、話速が学生により大きな影響を与えらると思われる。

3) 話速が上がるにつれ、学生は重要な情報を訳出しようとする意識があるが、認知的資源の過負荷で結果的には訳しやすいような情報を訳すことになってしまう。

6. 実験のプロセス

実験は、できる限り通訳現場の雰囲気を感じさせるために、教室に設置された三つのブースを利用した。

まず、実験が正式に始まる1時間前に、学生10名を対象に、アンケート調査、難訳語リストの配布と実験内容の説明を行った。この10名に、5名は同時通訳訓練を受けた大学院2年生（本実験の対象者）で、残り5名は訓練をまだ受けていない大学院1年生である。また、1年生の訳出率が低いことを想定し、アンケート調査における「先ほど聞いた発話はどう思いますか」の回答と事後調査のみを回収することにした。

次に、上述のように、話者原稿付きの場合はテーマが5組あるので、まず、被験者グループと1年生グループに自分の興味の持つテーマを選んでもらい、話者即興発話のテーマを含め、30分の準備時間を与えた。テーマの決定をこのようにしたのは、プロの通訳者が職業柄で、常に様々なテーマに触れて背景知識を蓄積するようにしているのに対し、学生はその必要性が理屈でわかっているにもかかわらず緊張感がないために、ついでが緩みがちだからである。よって、あるテーマに興味を持つというのは、当学生が普段それに触れたことがあることの現れであり、ある程度の背景知識を持つことが保証できるのではないかと思われる。ただし、同一グループの中で学生が選んだテーマが重ならないようにするために、必要であれば、ランダムに割り当てることもある。

また、30分の準備時間を与えたが、この30分の内に、学生が難訳語リストの単語を覚えたり、インターネットを使って情報収集したりすることが許される。

そして、30分が過ぎた時に、実験が正式に始まる。

まずは話者原稿付きの場合から始めるので、テーマ1、「北朝鮮ミサイル発射」を選んだ被験者グループの学生1と1年生グループの学生1'にそれぞれブース1とブース2に入ってもらい、通訳の準備が整ったのを合図で確認が取れると、話者Aの音声を流す。そして、学生が話者Aの発話を訳し終わった直後に、話者Aの発話についてのアンケート調査を書くように指示を出す。調査が記入済みの合図を学生から確認できたら、話速の異なった話者Bの音声を流し、先ほどと同様のプロセスを繰り返す。このように、学生1と1'がテーマ1を訳し済み、かつアンケート調査を記入した後に、代わりに学生2と2'、3と3'、4と4'、5と5'に順を追ってそれぞれブース1とブース2に入ってもらい、同じ手順で、残り4組のテーマへの通訳、アンケート調査の記入を依頼する。

次に、話者即興発話の場合を考察する。このパートでは、3人を1組に、3つのブースに同時に入って通訳してもらおう。10人が全く同様の内容、即ち釣魚島問題をめぐる話速の異なった話者3人の発話を訳すことになるので、第1組が通訳する際に、他の7人に聞かれないようにするために、一時教室から出てもらい、外で待機する形を取る。また、このパートでも、まず話者Lの発話を流し、学生3人がそれを訳し終わった直後にLについてのアンケートを記入してもらおう。記入済みの合図を確認できたら、続いて話者N、Mの発話を流し、それについてのアンケートの記入を依頼する。

そして、上述の流れを全て済ませえた最後に、今回実験全般についての感想、即ち事後調査を学生10人全員に配り、記入をしてもらおう。

なお、学生が通訳した音声は事前にブースに置かれた録音設備で録音される。

7. 実験結果

7.1 訳出率の算出結果

まず、収集した学生による訳文を書き起こし、前述のように、二年生だけの各訳文の訳出率を算出した上で、以下の表にまとめた。

①話者原稿付きの場合

話者発話	通訳方式	学生	話者	話速	話速+	新情報密度	新情報密度+	訳出率
	Genko	Id	Speaker	Speed	+ Pause	Newinfo	+ Pause	Ratio
原稿付き	1	1	A	5.69	3.90	3.56	2.44	42.66%
原稿付き	1	1	B	6.63	6.11	4.87	4.49	15.47%

原稿付き	1	1	C	5.66	5.03	4.73	4.21	26.89%
原稿付き	1	2	D	6.92	5.99	4.93	4.27	30.35%
原稿付き	1	2	E	3.29	2.64	2.10	1.68	73.15%
原稿付き	1	3	F	4.22	3.87	3.46	3.18	25.36%
原稿付き	1	3	G	6.26	5.55	4.90	4.34	22.15%
原稿付き	1	4	H	5.40	4.88	4.42	4.00	44.59%
原稿付き	1	4	I	6.64	5.69	3.59	3.07	46.67%
原稿付き	1	5	J	5.35	4.69	3.57	3.15	42.77%
原稿付き	1	5	K	5.00	4.33	4.45	3.85	40.95%

表 5

②話者即興発話の場合

話者発話	通訳方式	学生	話者	話速	話速+	新情報密度	新情報密度+	訳出率
	Genko	Id	Speaker	Speed	+ Pause	Newinfo	+ Pause	Ratio
即興	0	1	L	5.16	4.71	3.96	3.61	50.63%
即興	0	1	M	7.05	6.14	3.53	3.18	41.62%
即興	0	1	N	5.77	5.00	3.33	2.59	54.78%
即興	0	2	L	5.16	4.71	3.96	3.61	49.88%
即興	0	2	M	7.05	6.14	3.53	3.18	40.93%
即興	0	2	N	5.77	5.00	3.33	2.59	56.32%
即興	0	3	L	5.16	4.71	3.96	3.61	57.47%
即興	0	3	M	7.05	6.14	3.53	3.18	46.09%
即興	0	3	N	5.77	5.00	3.33	2.59	53.34%
即興	0	4	L	5.16	4.71	3.96	3.61	58.48%
即興	0	4	M	7.05	6.14	3.53	3.18	41.00%
即興	0	4	N	5.77	5.00	3.33	2.59	68.78%
即興	0	5	L	5.16	4.71	3.96	3.61	57.97%
即興	0	5	M	7.05	6.14	3.53	3.18	59.86%
即興	0	5	N	5.77	5.00	3.33	2.59	66.75%

表 6

上記話速の測定方法は 0.25 秒以上のポーズを区切りに、連続した発話を一つの Run として数え、Run ごとの話速を測定した上でその平均値を取った。また、Run ごとの話速 = Run ごとの音節数(個)/Run ごとの長さ(秒)。話速+ はポーズを考慮せず、テキスト全体の音節数を発話時間で割って得た結果である。そして、新情報密度はまず、話者による全体のテキストから旧情報と思われる「虚詞」を取り除き、次に、既に話者に一度言い出された情報、つまり重複した言葉をさらに取り除く。そこで、残されたのはすべて新しい情報になるわけであるが、それを発話時間(ポーズを考慮するかしないかの二つの場合に分ける)で割ると、新情報密度の数値が算出できる。なお訳出率の計算方法は前稿(2017)で詳細に述べたので、ここで省くことにする。

7.2 アンケート調査の結果

次に、アンケート調査の結果を統計し、下記三つに分けて分析した。

7.2.1 学生が知覚した話速について

1) 話者原稿付きの場合

テーマ 1 :

	話者 A	話者 B	話者 C
学生 1	非常に速い	非常に速い	やや速い
学生 1'	やや速い	非常に速い	非常に速い
実際の話速 (Pose 込み) : A<C<B 不一致			

テーマ 2 とテーマ 3 :

	話者 D	話者 E
学生 2	非常に速い	普通
学生 2'	非常に速い	やや遅い
実際の話速 (Pose 込み) : E<D 一致		

テーマ 4 :

	話者 F	話者 G
学生 3	非常に速い	やや速い
学生 3'	やや速い	非常に速い
実際の話速 (Pose 込み) : F < G 不一致		

テーマ 5 :

	話者 H	話者 I
学生 4	非常に速い	やや速い
学生 4'	非常に速い	非常に速い
実際の話速 (Pose 込み) : H < I 不一致		

テーマ 6 とテーマ 7 :

	話者 J	話者 K
学生 5	非常に速い	やや速い
学生 5'	非常に速い	やや速い
実際の話速 (Pose 込み) : K < J 一致		

2) 話者即興発話の場合

釣魚島問題	話者 L	話者 N	話者 M
学生 1	やや速い	非常に速い	非常に速い
学生 2	やや速い	やや速い	非常に速い
学生 3	やや速い	やや速い	やや速い
学生 4	普通	普通	やや速い
学生 5	やや速い	やや速い	やや速い
学生 1'	やや速い	非常に速い	非常に速い
学生 2'	やや速い	やや速い	非常に速い
学生 3'	非常に速い	非常に速い	非常に速い
学生 4'	やや速い	やや速い	やや速い
学生 5'	やや速い	やや速い	非常に速い
実際の話速 (Pose 込み) : L < N < M 不一致			

表から見ると、話速という変数に対する学生の知覚に食い違いが出たことがわかった。その現れとして、一つは実際の話速と学生の知覚した話速の不一致であり、もう一つは同じテーマに対する学生間の知覚的違いである。

まず、話者原稿付きの場合を見ると、合計 5 組の学生の中で、一致したのは 2 組だけで、かつこの 2 組の中でも完全に一致したのは 1 組 (学生 5 と学生 5') だけである。これは正にフランツ・ポエヒハッカー (2004) の言った話速の測定が「実に複

雑な問題である」ことの表れであり、ばらつきが生じたのはいくつかの原因によると思われる。

1) まず、挙げられるのは新情報密度の影響である。例えば、テーマ5において、話者Hは話速が4.88音節/sであり、5.69音節/sの話者Iより遅いことがわかるが、新情報密度は話者Hが4.42音節/sで、3.59音節/sの話者Iより大きいことが明らかである。新しい情報を処理するには認知的資源が必要なため、もしそれに見合った量の認知的資源がないと、学生が感覚的に話者の話速が早く聞こえるであろう。それゆえに、本例では、話者Hの話速が話者Iより遅いにもかかわらず、学生4が真逆の結果を報告し、学生4'も両話者の話速が同様に速いとの直感を報告したわけである。

2) また、新情報密度の他に、話者発話のポーズ、内容の難易度も学生の知覚した話速に影響を与えていると思われる。例えば、テーマ1において、話者Aの話速は3.90音節/sで、BとCと比べて最も遅いにもかかわらず、学生1の感覚では非常に速いとしている。それは、話者Aの発話はポーズが長く、連続した発話の話速が速い特徴があり、学生1にとって、長いポーズが話速の速さそのものを希釈することができなかったことによるのではないかと考えられる。また、テーマ4において、学生3'が知覚した話速が実際の話速に一致しているのに対し、学生3は逆の結果を報告した。これは学生3からすれば、話者Fの話している内容がGより難しく感じたからではないと思われる。実際話者Fの発話において、サードの配備地名を始め、専門用語が何個かあるのは確かなことである。一方、それに関する学生3へのアンケートを見ると、「もし聞き取れたが、訳し方がわからないというような言葉があれば、中国語で書いてください」との欄に、専門用語が3個も記入されたことがわかった。言い換えると、聞き取れたのに訳せなかったという感覚が尾を引き、結局話速が速すぎるという結論に変容されたのではないかとと思われる。

3) さらに、学生自身の話速、速さへの主観的認識も結果の不一致を呼んだと思う。例えば、話者Dと比べ、話者Eの話速がかなり遅いが、学生2にとって、Eの話速が普通に聞こえたのに対し、学生2'からしては、普通よりやや遅くさえ感じたのである。

次に、話者即興発話の場合を考察してみる。

この場合でも、知覚した話速が完全に一致したのは話者2、2'、5'と話者3、5、4'の2組のみで、かつこの二つの組を含め、様々な結果の組み合わせがあることが確認できた。注目してほしいのは、話速の最も速い話者Mに対する学生群の回答である。つまり、Mの話速が6.14音節/s(発話形式を問わず、最も高い数値である)に達したほど速いにもかかわらず、10人の中に4人もそれがやや速いとの判断を下し、中の3人が話者L、Nとの差がないとさえ思ったようである。ここからも、話者即興の場合、情報の余剰性がもたらした新情報密度の低下により、話速が学生にとって、も

はや非常に敏感な要因でなくなったと見て取れる。

上述のように、話速はただ測定した無表情の数値ではなく、新情報密度、内容の難易度、ポーズ、発話形式、そして、通訳者に影響を与えたその他の全ての要因が活発に働くのである。

7.2.2 学生が予測した訳出率と実際の訳出率

次に、学生が予測した訳出率と実際の訳出率の一致性を見る。ただし、1年生の予測した訳出率が50点以下のものが多く、且つ実際の訳出率も極めて低いことを考慮すると、本項目は2年生の回答だけを集めることにした。

例：

学生 1：

話者	話者 A	話者 B	話者 C	話者 L	話者 N	話者 M
知覚した話速	非常に速い	非常速い	やや速い	やや速い	非常に速い	非常に速い
予測した訳出率	50 -	50 ~ 60	60 ~ 70	50 ~ 60	50 ~ 60	50 ~ 60
実際の訳出率	42.66	15.47	26.89	50.63	54.78	41.62
一致 or not	○	×	×	○	○	△

学生 2

話者	話者 D	話者 E	話者 L	話者 N	話者 M
知覚した話速	非常に速い	普通	やや速い	やや速い	非常に速い
予測した訳出率	50 ~ 60	50 ~ 60	60 ~ 70	60 ~ 70	50 ~ 60
実際の訳出率	30.35	73.15	49.88	56.32	40.93
一致 or not	×	×	△	△	△

学生 3

話者	話者 F	話者 G	話者 L	話者 N	話者 M
知覚した話速	非常に速い	やや速い	やや速い	やや速い	やや速い
予測した訳出率	50 -	50 ~ 60	50 ~ 60	50 ~ 60	50 ~ 60
実際の訳出率	25.36	22.15	57.47	49.41	46.09
一致 or not	○	×	○	△	△

学生 4

話者	話者 H	話者 I	話者 L	話者 N	話者 M
知覚した話速	非常に速い	やや速い	普通	普通	やや速い
予測した訳出率	50 -	50 ~ 60	50 ~ 60	60 ~ 70	50 -
実際の訳出率	44.59	46.67	58.48	68.78	41.00
一致 or not	○	△	○	○	○

学生 5

話者	話者 J	話者 K	話者 L	話者 N	話者 M
知覚した話速	非常に速い	やや速い	やや速い	やや速い	やや速い
予測した訳出率	50 -	50 -	50 ~ 60	50 ~ 60	50 ~ 60
実際の訳出率	42.77	40.95	57.97	66.75	59.86
一致 or not	○	○	○	△	○

表の中で、学生の予測した話速が実際の話速に一致した場合は○、10%もしくはそれ以下の差がある場合は、接近していると見なし、△で表示し、また、大きな差がある場合は×で表示した。全体から見ると、○と△の標識が多く、学生群の予測はかなりの程度で実際の訳出率に一致、もしくは接近していることがわかった。一方、発話形式別に見ると、学生はいずれも話者即興の場合より、話者原稿付きのほうに「×」が集中しているように見える。例えば、学生1は話者Bへの訳出率を50～60と予測したが、実際の訳出率が15.47にとどまり、差が驚くほど開いたことがわかる。また、学生3の場合も、話者Gへの訳出率を50～60と予測したが、実際は22.15で非常に低いものになってしまった。予想と外れた理由を究明するに際し、①「先ほど聞いた情報を覚えられる範囲で中国語で要約してください」及び②「もし聞き取れたが、訳し方がわからないというような言葉があれば、中国語でその難訳語を書いてください」との項目から、何かのヒントを得ることも可能なはずである。というのも、もし項目①で上手くできたが、実際の訳出率が低ければ、それは産出段階における認知的資源の不足によるものだとわかるからである。また、もし項目①の完成度が訳出と同じように香ばしくなければ、それは理解段階における認知的資源の不足に結びつくことになる。さらに、項目②に言葉が記入され、且つこのような言葉は訳文に織り込まれていなく、もしくは間違った形で織り込まれていれば、それは通訳プロセスにおける転換段階の失敗に帰結することができるが、もし項目②に記入される言葉がなく、且つ訳文の中にそれと思われるような言葉もなければ、おそらくそれはインプットの段階に問題が発生したのではないかと考えられる。本実験で使った学生が全員中国人なので、母国語を日本語に訳す際に、極めて難しい内容でない限り、理解、インプットの段階に問題がないはずである。言い換えると、情報を聞き取れなかったというのは話者の話速が通訳者にとって速すぎて、認知的資源が訳出に充当される間に、新たに入ってきた情報が処理されぬままに流されていったことを意味している。それらの情報があることをそもそも意識していなければ、予測と実際の訳出率との間にズレが出るのも決して不思議なことではない。逆に、話速が遅ければ、学生がほとんどすべての情報を聞き取ることができたので、どのような情報を漏らしたのか、どのような情報を訳しきれなかったかを自覚する余裕が出てくる。そこで、アンケートを埋める際に、訳せなかった情報を過剰に意識すると、訳出率の過小評価が発生しかねなくなる。

上述の観点を実証するために、学生1と3の例を見てみよう。

学生1

項目①への回答: 中方一直主张以和平协商的方式来解决朝核问题。各国应发挥各自的作用。中国呼吁通过多边协商以解决此问题。

実際の訳文：中国はいつでも平和交渉を主張していますが、各国の協調により問題の解決に努めるべきだと主張しています。

項目②への回答：和平協商

原文：

会上有记者提问，中方是否应该在朝核问题的解决上起到建设性的作用并与美国加强合作。对此耿爽表示，中方的努力目共睹。但问题的核心不在中国中方一向主张，对话和协商是解决朝核问题的最终出路。发言人也呼吁有关各方能够承担起自己的责任，做自己应该做的事情。中方也愿意同美方以及其他各方一起来推动朝核问题的最终解决。

学生 1 の訳文と聞き取れた情報がほとんど同じであることがアンケートで明らかにされた。また、「和平協商」の訳し方に疑問を持っていたようであるが、実際の訳を見て特に問題がないと考えてもよい。但し、話者の原文を参照すればわかるように、情報の漏れが非常に多いにもかかわらず、学生が自分に割と高い点数をつけた。それはつまり、学生 1 は自分がそれほどたくさんの情報を聞き流したということを経験から意識しておらず、速い話速による判断の失敗を犯したということであろう。

さらに、学生 3 による話者 F への訳を見る。前述のように、この例では、学生の予測した訳出率と実際の訳出率と一致しているが、予測と外れたものと比べてどのような特徴があるのかを探してみる。

学生 3

項目①への回答：韩国配备萨德受到了各方的反对。韩国于本月正式与乐天集团交换 6.7 万平方公里的土地，用于部署萨德导弹系统。民众对此也表示了强烈反对。

実際の訳文：韓国、ロッテグループとサードの配備について、正式な土地交換協議が結ばれました。ロッテの 148 キロメートルの土地をサードの配備地として、もらいました。韓国のアメリカ地位協定によりまして、この後、色々なことについて、サードの配備については、民衆もサードの配置に対して反対しています。

項目②への回答：京畿道南阳，星洲，国家安保

原文：

韩国国防部 28 号表示，当天与乐天集团就萨德部署用地正式签署换地协议。根据该协议，国防部将位于京畿道南阳市的一块 6.7 万平方米的军用土地换取乐天集团面积为 148 万平方米的星洲高尔夫球场，作为萨德部署地。韩国军方计划于今年 5 月到 7 月间完成萨德入韩。之后，韩军将推进各项进程。依据驻韩美军地位协定向美方出让土地。随后进行设计、环境影响评估及建设施工等环节。从 27 号起，韩国市民团体连续两天在国防部门前举行抗议集会，强调部署萨德是韩美间强行推进的违法事项，并表

示星洲郡及金泉市民众将就国防部的行为向法院提起行政诉讼。

話者 F への訳と項目①への回答を見ると、前の例と同様に、実際の訳文が項目①への回答より情報量が多いことがわかる。ただし、本例では、「6.7 万平方公里」から見られたように、項目①への回答に入っていたが、実際の訳文に反映されていない情報もある。また、「韓国のアメリカ地位協定によりまして」、「この後、色々なことについて」など未完成の文もあることから、情報が確実に認識され、処理されたにもかかわらず、何らかの原因で訳すことができなかつたように見て取れる。一方、項目②では、前の例と違って、学生 3 が記入した言葉はいずれも訳文の中に含まれていない。つまり、これは学生がその言葉を聞き取れたつもりであったが、訳し方がわからなかつたのでそれを放棄するしかなかつたというわけである。

このように、インプットが順調で、アウトプットができなかつた場合に、学生の頭に、訳せなかつた情報が数多くあるという意識が働き、その影響を受け、予測した訳出率も実際の訳出率にかなり近づくことができたと言えよう。

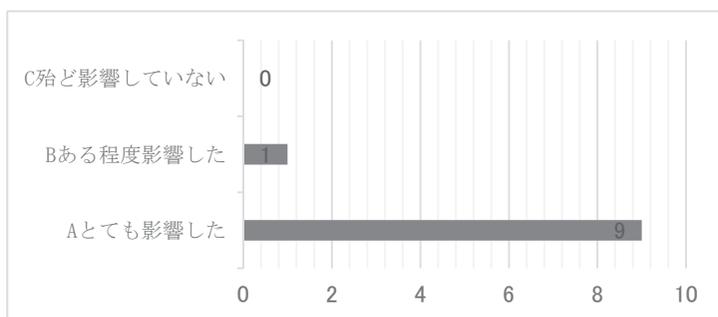
以上は学生の予測した訳出率と実際の訳出率との一致度を観察してみた。簡単にまとめると：

- 1、通訳者はかなりの程度で、自分の訳質を判断することができるように思われる。
- 2、話者原稿付きの発話形式より、即興発話の方は判断しやすいようである。それは即興発話の新情報密度が低く、余剰情報が多い上に、情報構造も旧から新、背景から前景へと発話の理路により沿っており、意味が比較的につまみやすいからであろう。
- 3、予測が外れた理由として、情報理解、即ちインプットの段階で、情報が処理されぬままに流されていった場合に発生しやすい。逆に、インプットの段階で、情報がきちんと処理されたならば、予測が当たる確率が上がってくる。本実験では、1組の話速の異なつたテキストは一人の学生が通訳するので、通訳レベルがまず不変の入力変数と見なせる。また、入力言語は母国語の中国語なので、意味の理解においても問題がないように思われる。とすると、インプットが順調にできたかどうかはかなりの程度で話速に左右されることになる。換言すると、話速が通訳者にとって速すぎると、とりわけ新情報密度もそれに比例したスピードで増加すると、通訳者の判断力が下がってしまうのである。

7.2.3 事後調査の統計結果

この部分はいくまでも直感的なものを聞くので、一年生の回答も参考になれると思われる。よつて、学生 10 人全員のデータを、質問ごとに分析することにした。

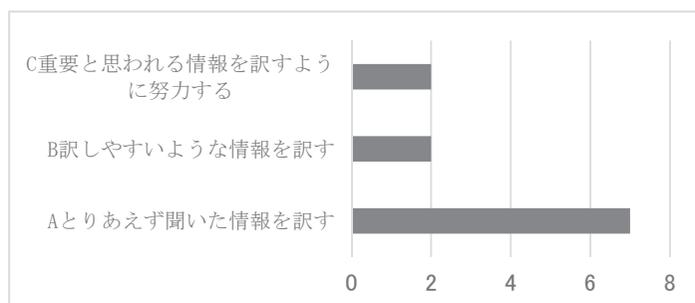
- 1、「話速が自分の訳出に影響を与えたと思ひますか？」との質問について：



グラフ 1

グラフに示したように、話速の影響を聞いたところ、10人のうちに、9人が「とても影響した」を、1人が「ある程度影響した」を選んだ。言い換えると、通訳者本人も話速が訳質に影響を与えたことを十分に意識していることがわかった。

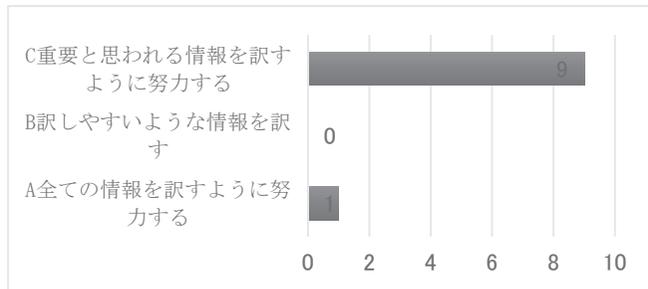
2、「話速の速いテキストを訳す時に」との質問について：



グラフ 2

仮説で本稿は話速の速いテキストを訳す時に、学生は重要と思われる情報を訳すように努力すると予測したが、アンケートの回答を見ると、とりあえず聞いた情報を訳すとの答えが圧倒的に多く、他の選択肢はそれぞれ二人ずつしかいなかったことがわかった。なお合計 11 人になったのは一人だけが B と C を同時に選んだからである。つまり、学生が話速の速いテキストに直面した際に、最初から、話者の発話を図式のように構築する意図、もしくは余裕がなかったと言える。代わりに、聞き取れた情報のみをできるだけ訳すことに専念し、それをリスク回避の対策とした。本実験でも見られたことであるが、これが学生の訳文に不完全な文が多く、ロジック的に繋がらない意味の断片が観察された原因でもあるのではないかと思う。

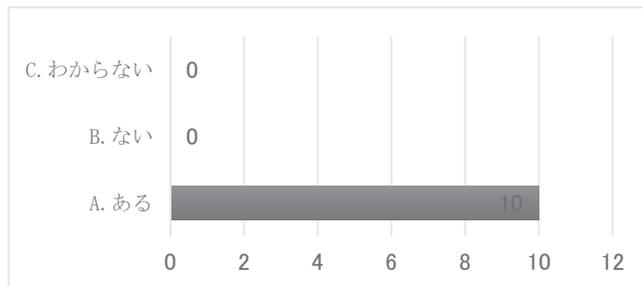
3、「話速の遅いテキストを訳す時に」との質問について：



グラフ 3

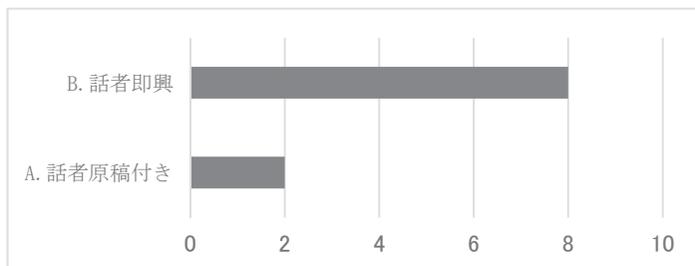
本質問に対する予測は「全ての情報を訳すように努力する」を選ぶだろうとのものであったが、実際の結果を見ると、「重要と思われる情報を訳すように努力する」との答えを選んだ学生が9人もおり、絶対多数であることがわかった。つまり、学生がレベルがまだそれほど高くないためか、話速が遅い場合になっても、全部訳出したと貪っていないように見える。それより、どのような情報を聞き手に伝えれば効果的なのかという、ロジック的な面で考える余裕が出るようになるわけである。

4、「今回話者原稿付きと話者即興発話という二つの発話パターンがあるが、それは訳出率に影響を与えたと思いますか？」との質問について：



グラフ 4-1

「ある場合、どちらがより訳しやすいと思いますか？」との質問について：

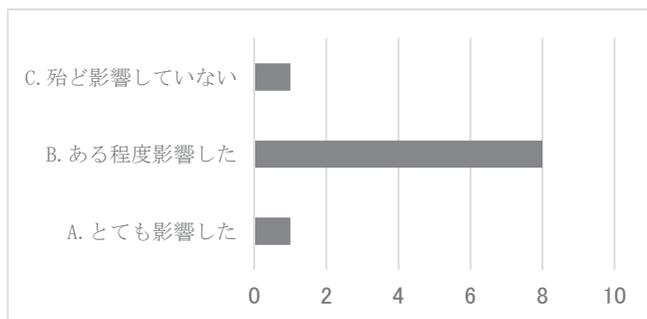


グラフ 4-2

さらに、話者発話形式について調査したところ、10人全員が「影響がある」と答え、中に予想通りに、絶対多数である8人が話者即興発話の場合に、より訳しやすいと

考えているのである。前節では学生が訳出率の予測において、即興発話の方でより優れたことが証明できたが、これはつまり、訳しやすいからこそ、自分の訳質の良し悪しをより自覚したのではないかと思われる。

5、「今回、話速以外の要因(例えば、体調など)によって訳出率が影響されたと思いますか?」との質問について:



グラフ 5

この質問に対し、「殆ど影響していない」との回答が好ましいが、実際の結果を見ると、「ある程度影響した」という答えが最も多かったことがわかる。影響の理由として、体調が悪い、集中力が足りない、話者発話の音質が優れない、実験の前に長時間の面接で、思考力と反応速度がある程度低下したなどが挙げられる。

話速以外の要因ができるだけ影響をしないように、本稿は実験の準備段階から実行するまで心がけていたが、それでも同時通訳に伴ったりリスク要因を完全に回避することができなかった。まず、被験者の体調は予測し得ない内部リスクなので、コントロールすることが不可能である。また、実験する前に、被験者が何ををしたか、それによって、実験にどのような影響をするかも事前に調べるできない要因であろう。さらに、本実験で採用した音声は録音したもののなので、雑音がある程度含まれてしまった。その雑音が被験者に、とりわけ外部環境に非常に敏感な被験者に、影響を与えたのも事実であろう。しかし、アンケート結果が示したように、これらのリスク要因の影響が甚大なものではないことを考慮すれば、今回の実験の有効性が認められるべきだと思う。

8. まとめ及び今後の課題

以上のように、本稿は学生に注目し、学生が話速というリスクの前にどのような特徴が見られるのかを話者原稿付き、話者即興発話の二つの形式に分けて、量的分析と質的分析で探ってみた。それによって、次の結論に辿り着くことができた。

- 1、通訳者はかなりの程度で、自分の訳質を判断することができるように思われる。
- 2、話者原稿付きの発話形式より、即興発話の方は訳質が判断されやすいようであ

る。

3、話者発話形式が学生の訳出に大きな影響を与え、話者原稿付きの場合より、即興発話の方は学生にとって訳しやすい。

4、話速が学生の訳出に大きな影響を与え、話速が上がると、学生は重要情報を見失い、とりあえず聞いた情報を訳す傾向がある。

但し、今回は訳出率と学生が知覚した話速との相関が観察できなかったのも、その理由分析を今後の課題にしたいと思う。

参考文献：

楊承淑 (2010) 『口译的信息处理过程研究』 南开大学出版社

フランツ・ポエヒハッカー (2008) 鳥飼玖美子訳 『通訳学入門』 みすず書房

川端谷津子 (2014) 「同時通訳における起点テキスト特性と訳出パフォーマンス—中国語から日本語への訳出の場合—」 『杏林大学院論文集』 (11) : pp.67 – 87

船山仲他 (2012) 「通訳するための思考」 『通訳翻訳研究』 第 12 号 pp.3 – 19

石塚浩之 (2008) 「同時通訳の SL/TL の差異から探る概念的処理の実態」 『通訳翻訳研究』 第 8 号 pp.19 – 35

張威 (2011) 『口译认知研究：同声传译与工作记忆的关系』 外语教学与研究出版社

Isham(1994) Memory for sentence form a er simultaneous interpretation: Evidence both for and against deverbalization, In Bridging the Gap: Empirical Research in Simultaneous Interpretation, S. Lambert and B. Moser-Mercer (eds), 1912-11. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins

辰巳桂子 (2013) 「同時通訳の神経基盤：同時通訳者に特異な脳活動」 東北大学博士論文

張晶 (2017) 「リスク回避の視点から見る中日同時通訳における話速と訳出率の相関関係—話者原稿付きと即興発話の場合を中心に—」 『韓国日本語文化学会発表論文集』 pp.69—72

2016 年秋学期 博士後期課程（博士）修了論文

2017.3

	専攻	学位授与者	博士論文題目	指導教授
1	開発問題専攻	藤田 由香利	中国語教育における通訳技術訓練の導入研究 —日本語母語話者の中国語学習初期におけるクイックレスポンス導入の効果—	塚本 慶一

2016 年秋学期 博士前期課程（修士）修了論文

2017.3

	学位授与者	リサーチ ペーパー	修士論文題目	指導教授
1	高超		中央巡視制度の効用 —改革開放後央地関係を中心に—	劉 迪
2	王 昊		F T A A Pにおけるシルクロード経済ベルトの役割	小野田 欣也
3	王 淇		電子政府における現状考察及び日中比較 —オープンデータ取組の視角から—	進邦 徹夫
4	賈 秀華		水問題への企業対応の現状と課題	田中 信弘
5	熊谷 貴和		中国人民解放軍に対する、中国共産党の政治的な意図を含んだ誘導の存在有無について	渡辺 剛
6	謝 威		C S Vによる企業競争の強化	田中 信弘
7	朱 琳		日本アニメ産業の再生 —若手アニメーターの就労環境改善と人材育成—	木村 有里
8	武田 亜湖		消費税における中小事業者に対する優遇措置の特例	知原 信良
9	劉 日初	※	成長する中国小売業 —中国におけるセブンイレブンの発展	木村 有里
10	高橋 土夢	※	日本語初級授業の導入場面において出現する学習者の自発的アクトと教師のアクトとの関わり	荒川 みどり
11	張 根鳴		明治初期におけるルビ表記の研究 —『開卷驚奇・暴夜物語』を中心に—	玉村 禎郎
12	片山 奈緒美		インタビュアーのストラテジー変化 —テレビの対談番組における質問とFTA—	荒川 みどり
13	許 麗雲		細長い物の数え方について —日中対照を中心に—	金田一 秀穂
14	邵 盼盼		日本地名の特徴	楠家 重敏

15	張 悦文		宅配業サービスから見る日中比較文化研究	小山 三郎
16	翟 洪力		日本の新聞広告における表記の研究 —明治、大正時代を中心に—	玉村 禎郎
17	房 克玲		四字熟語研究 —日中両言語の対照を中心に—	玉村 禎郎
18	梶本 裕介		日本における Deng 熱の経済的負担に関する研究	北島 勉
19	櫻井 澄枝		タイ王国・コンケン病院における乳ガン治療に関する費用分析	北島 勉
20	白 曉敏		中国の中老年層における、高血圧と糖尿病の認知度及びその規定要因 —内モンゴル赤峰市における調査から—	岡村 裕
21	李 清		日本と中国における結核患者の動向と結核対策に関する一考察	森田 耕司
22	黒岩 謙太郎		中文日訳にみられる言語干渉について	塚本 慶一
23	孔 陽丹		ペリー遠征における通訳者の役割 —ウィリアムズを中心に—	塚本 尋
24	陳 逸舒		中国語指導者の発言の日本語訳についての一考察 —通訳の視点から—	塚本 慶一
25	陳 慧敏		日本語スピーチを格調の高い中国語スピーチに訳すためのストラテジー —安倍首相のスピーチを例に—	塚本 尋
26	陳 飛飛		「当頭砲」の日本語への訳出についての一考察	塚本 尋
27	HOANG DUC NGUYEN LOC		Culture's influence on Vietnamese perception of education and work.	坂本 ロビン

2017 年春学期 博士前期課程（修士）修了論文

2017.9

	学位授与者	リサーチ ペーパー	修士論文題目	指導教授
1	卢 灵芝		中国温州家庭協会における構造及びその特徴	劉 迪
2	朱 昌碩		患者の自己決定権	橋本 雄太郎
3	蘭 留		中国都市部における老人ホームに関する研究 —広西省の事例を参考して—	楠家 重敏
4	孫 萌		「紅樓夢」日本語訳の相違点 —四字熟語を例に—	玉村 禎郎

5	鄧 駿		オノマトペの使用状況の考察と分析 —現代日本語下記言葉を中心に—	玉村 禎郎
6	陽 瑞蘭		日本語と中国語の定型句における動物の意味対照 —比喩表現から—	金田一 秀穂
7	井口 文子		介護離職防止における「介護休業法」と「介護保険法」の有効性及び課題	岡村 裕
8	胡 慧涛		中国都市部における中高年者慢性非感染疾患（NCD）に関する研究	北島 勉
9	施 金龍		日本と中国における使用済家電製品の再商品化の研究	斉藤 崇
10	趙 政		在日中国人の出産に影響を及ぼす要因に関する研究 —在日中国人家庭の出産と育児援助方策の提言に向けて—	高坂 宏一
11	趙 月		変訳の中日通訳における応用	塚本 尋
12	唐 詩		ウェブニュースの中国語訳出における難点と対策に関する一考察	塚本 尋

博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	藤田 由香利
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲国第 38 号
学位授与の日付	平成 29 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規程第 5 条
学位論文の題目	中国語教育における通訳技術訓練の導入研究 —日本語母語話者の中国語学習初期における クイックレスポンス導入の効果—
審査委員 主査	杏林大学外国語学部教授 塚本 尋
副査	杏林大学大学院国際協力研究科特任教授 塚本 慶一
副査	北京第二外国語大学副学長・教授 邱 鳴

要 旨

藤田由香利氏学位請求論文審査報告

藤田由香利氏より提出された博士学位請求論文「中国語教育における通訳技術訓練の導入研究 —日本語母語話者の中国語学習初期におけるクイックレスポンス導入の効果—」は、通訳技術訓練法の一つであるクイックレスポンスを中国語教育に導入する効果についての研究である。

通訳技術訓練法の一つであるクイックレスポンスが外国語教育に役立つという見方は従来からあったものの、それをいかに科学的に実証し、その機能のプロセスを論理的に説明できるかは、未だ解明されていない点が多く残っている。その意味において、本研究は大いに意義がある。

【論文の構成】

本論文の構成は、論理的で分かりやすく、目次 3 ページ、本文 68 ページ、参考文献 6 ページ、関連資料としての調査・記録データ 8 ページの、計 85 ページでまとめられている。論文は次の各章により構成されている。

第1章 研究の背景と目的

1.1 研究の背景

1.1.1 通訳訓練と語学学習の目的の相違点と共通点

1.2 語学教育における通訳技術訓練法の導入研究

1.2.1 シャドーイングの導入研究

1.2.2 クイックレスポンス導入の可能性

1.3 研究の目的

1.4 研究の構成

第2章 中国語教育

2.1 中国における対外漢語教育

2.1.1 中国におけるリスニング強化のための指導

2.2 日本における中国語教育

2.2.1 日本におけるリスニング強化のための指導

第3章 SLA 研究

3.1 インプット仮説と自動化理論

3.2 言語学習ストラテジー

第4章 日中通訳技術訓練法

4.1 通訳者に求められる能力

4.2 通訳技術訓練法

4.2.1 技術的機能強化による訓練法

4.2.2 意識的強化による訓練法

4.3 クイックレスポンス

第5章 中国語教育への通訳訓練法の導入事例

5.1 高等学校における外国語教育でのクイックレスポンス導入

5.1.1 英語教育(越智美江)

5.1.2 中国語教育(金子真生)

5.2 大学における中国語教育でのクイックレスポンス導入

5.2.1 通訳訓練法導入の有効性について(古川典代)

5.2.2 通訳訓練法を取り入れた初中級の授業(永田小絵)

5.2.3 クイックレスポンスの導入法について(藤田由香利)

第6章 中国語学習者へのクイックレスポンス導入調査

6.1 調査概要

6.1.1 調査対象

6.1.2 教材の作成

6.2 調査方法

6.2.1 教室活動

6.2.2 教室外活動

6.3 調査結果

6.3.1 クイックレスポンスの口頭確認による調査

6.3.2 リスニング内容理解による調査

6.3.3 アンケートによる学生の意識調査

第7章 クイックレスポンス導入による可能性

7.1 クイックレスポンス導入による効果がみられたケース

7.1.1 語彙の定着と反応速度が速まったことによりリスニング力が向上した

7.1.2 語彙の定着からリスニング力が定着した

7.1.3 反応速度が速まったことからリスニング力が向上した

7.2 クイックレスポンス導入による効果が見られなかったケース

7.2.1 問題形式に慣れることによってリスニングが向上した

7.2.2 クイックレスポンスによる効果がリスニング力の向上に繋がらなかった

第8章 まとめ

参考文献一覧

謝辞

関連資料【調査 記録データ】

【論文の概要】

本研究は中国語学習者のリスニング力の強化において学習効果を上げる1つのアプローチとして、クイックレスポンス練習法の有効性を検証することを目的としている。語学学習にクイックレスポンスを導入して単語の暗記を行うことにより、インプットとアウトプットをバランスよく取り入れることができ、語彙定着へと繋がる。また、素早く単語に反応する練習を重ねることで音声への反応速度が向上し、キーワードの把握や聴き飛ばすといったリスニング力の強化に繋がる。

こうした理論を基に、学習初期の中国語学習者を対象とし、日本語母語話者にクイックレスポンス導入による効果検証を3種類の調査にて行い、その結果を比較分析することにより結論を導き出している。

本研究を進めるにあたっては、語学教育における学習法と通訳訓練法の両面から考察を進めることを大枠としている。語学教育についてはSLA (Second Language Acquisition) 研究の観点からインプットとアウトプットのバランスや言語学習ストラテジーを取り上げることでリスニング力強化に必要な要素を確認している。一方で、通訳訓練法としては様々な訓練法の中から、素早く単語に反応する練習を重ねることでリスニングに必要な音声への反応速度が向上し、聞き取れない単語が出てきた場合

に、その単語を飛ばして次の音声に集中するといった力も向上するクイックレスポンスについてリスニング力強化の可能性を述べている。そして通訳訓練としては基礎トレーニングであるクイックレスポンス練習法の具体的効果や語学学習への取り入れ方を先行研究と予備調査から検討を行っている。

具体的な構成として、第1章では、語学教育の学習法と通訳者養成のための訓練法は区別しなければならないことを前提としながらも、近年では語学教育への通訳訓練法導入による効果が示され、徐々にその導入が浸透しつつある背景を述べている。それを踏まえたうえで通訳訓練法と中国語教育の双方から考察することで結論に導くための全体構成を述べている。

第2章では、中国における対外漢語教育と日本での中国語教育について取り上げている。時代の流れと共に第二外国語としての中国語教育にも教養としての知識から実践として使える中国語を習得することが求められるようになり、その教授法も変化し、今日では様々な実践的教授法が展開されている中で、とくにリスニング強化についての指導方法などの現状把握を行っている。

第3章ではSLA研究のうち、インプット仮説と自動化理論を取り上げ、大量のインプットと少量のアウトプットをいかにして行うべきかを検討している。また、自律学習を促すことを目的とした言語学習ストラテジーからリスニング力の強化に関わる部分を調査し、どのようなアプローチがリスニング力の強化に期待できるのか考察を行っている。

第4章では日中通訳技術訓練法について、技術的な機能強化と理解を深める意識強化のトレーニング方法について述べたうえで、機能強化であるクイックレスポンスの位置づけやその効果を示している。そしてクイックレスポンス練習法を行う場合、こういった言語学習ストラテジーに当てはまるのかを考察し、クイックレスポンスとリスニング力向上の関連性を示している。

第5章では、中国語教育のクイックレスポンス導入事例を挙げている。そしてこれまでの導入事例では通訳訓練を総合的に取り入れることにより語学力向上を図っており、クイックレスポンスのみを取り上げた場合の具体的効果については不鮮明であることを述べ、クイックレスポンス導入にあたっての導入方法や注意すべき項目、また具体的効果を示すための評価方法などを考察している。

第6章は日本語母語話者を対象とし、リスニング力を強化する練習法として中国語学習初期におけるクイックレスポンスの導入調査を行った記録である。調査対象は筆者の勤務校で中国語の科目を履修している1・2年生の学生15名である。学習者個人の伸びを測定するため、学習者が単語を暗記する際にクイックレスポンスを導入した場合と導入しなかった場合、また音声を聞きながら単語暗記を行った場合と、音声を聞かずに暗記した場合に分けて検証し、それぞれ個別に比較を行っている。調査は多方向から効果を検証するため3種類行われている。反応速度と語彙定着率を測定す

るクイックレスポンスの口頭確認による調査、単語の暗記法とリスニング力向上の効果を測定するリスニング内容理解による調査、そして数値と学生の感覚によるずれを確認するアンケートによる学生の意識調査である。

第7章では、前章での3種類の調査それぞれの結果を受けて、中国語の初期学習者にクイックレスポンスを取り入れることで、語彙の定着と反応速度に変化が見られ、リスニング力の強化にも繋がるのではないかと、ということに対して数値からある一定の結果が見られたことを導き出している。そして、3種類の調査結果を個別ではなく全体として横断的に比較考察した場合にどういったケースが発生しているかを分析することにより、傾向別に分類を行っている。そして、第8章では研究の結論と今後の課題について論じている。

本調査を通じて、クイックレスポンスによる単語への反応速度を具体的数値にて記録し比較することで、学習者自身の感覚だけではない個人の学習効果を可視化することができたとしている。

反応速度について、クイックレスポンス導入で最も効果のあった学生は、音声を聞かずに自身の学習方法で単語リストの暗記を行った1回目の場合と、単語リストの音声をききながらクイックレスポンス練習法にて暗記を行った3回目の場合との比較で、3回目の方が5.72秒速まっており、また単語リストの音声を聞きながら自身の学習法で暗記を行った2回目と、クイックレスポンス練習法にて暗記を行った3回目との比較で3回目の方が1.82秒スピードが速まったという結果を出した。反応速度が速まることで語彙定着にも繋がっていることが確認できたと判断している。

また3回行ったリスニングテストの結果を見ても、クイックレスポンス練習法にて単語の暗記を行った場合に15名中13名が高得点であり効果があったと言えるという。

第7章の調査結果の比較考察では3種類の調査を横断的に比較することで、単独の調査では明確に示されなかったクイックレスポンスのリスニング力強化にあたる影響がみられた点を論じている。反応速度に変化がみられることによりリスニング力の強化に繋がる場合や、語彙の定着からリスニング力の強化に繋がる場合など、今回の調査では5種類の反応に分類することができ、ある一定の方向が見られることが分かったと述べている。効果が見られなかった場合にも導入期間や導入方法など様々な要因が考えられるため効果がなかったという断定はできないとしている。必ずしも対象学生全員にクイックレスポンスが適しているとは限らないが、リスニング力の強化のための手法として、クイックレスポンスを上手く導入することができれば、リスニング力の強化の具体的練習法として取り入れることができる、という結論を導いている。

様々な不確定要素から課題は残るものの、クイックレスポンスを導入することで、学習者にはいくつかの傾向が見られ、リスニング力の強化に繋がっているという1

つの根拠となった。今後も更なる研究を重ねることによって、教室での指導の他に自律学習を促す方法として取り入れることで日本語母語話者の抱えるリスニングに対する苦手意識を軽減させ、学習者によりの確な指導を行えることが期待できるであろうとしている。

【審査結果】

本論文は、通訳技術訓練法の一つであるクイックレスポンスを中国語教育に導入する効果についての研究である。

通訳技術訓練法の一つであるクイックレスポンスが外国語教育に役立つという見方は従来からあったものの、それをいかに科学的に実証し、その機能のプロセスを論理的に説明できるかは、未だ解明されていない点が多く残っている。その意味において、本研究は大いに意義がある。

本論文は主に二つの部分によって構成されている。第一部分は第1章から第5章までであり、主にクイックレスポンスを中国語教育に導入する可能性と、導入の意義及び従来の研究を理論と実践の両面から論じている。第二部分は第6章から第8章までであり、実際の調査によって、第一部で立てた予測を論証するという構成である。

第一部分において、筆者はまず、通訳訓練の方法を語学学習に導入する可能性について論じている。通訳訓練と語学学習は相違する部分がある一方、一致する点も存在する。それは通訳訓練の機能強化部分と語学学習の運用能力強化部分である。

実際の例として、語学教育における通訳技術訓練法の導入についての研究、例えば、シャドーイングについての研究は英語分野においては、早くから行われており、その成果を示す文献も多いことは筆者が指摘している通りである。一方、クイックレスポンスについては、通訳訓練では基礎トレーニングであるにもかかわらず、語学教育への導入としてはあまり取り上げられておらず、また、研究対象ともされていない。

第二部分において、筆者は第一部分の論述を踏まえ、中国語学習者へのクイックレスポンス導入調査を実施し、それによる学習効果が認められることを実証している。

論文のポイントは第二部分にあり、15名の学生を対象に行った調査を通じて、クイックレスポンスによる単語への反応速度を具体的数値にて記録し、比較することで、学習者の学習効果を可視化した。更に調査結果の比較考察では3種類の調査を相互に比較することで、単独調査では明確に示されなかったクイックレスポンスがリスニング力の強化に与える影響を浮かび上がらせた。

論文の分析は緻密で着実であり、より多くの角度からの観察と分析は結論の客観性と正確性に繋がっていると思われる。

本論文はリスニング力を強化するための練習法の一つとして、通訳技術訓練法の一つであるクイックレスポンスを導入することにより、更に効果的に中国語学習を行え

ることを証明しており、外国語教育の指導に関して示唆に富んだ研究成果であり、その意義は評価に値する。

以上の点をもって、審査員一同はこの研究の学術的価値を認め、質の高い博士論文であると判断する。口頭発表ならびに口頭試問でも明晰に論旨を述べ、質問には的確に答えて、時間をかけて丹念に作成された論文であることが確認できた。本論文は博士（学術）の学位授与要件を十分に満たしていると判断する。

筆者の藤田由香利氏は、勤務先大学での教育現場で日々の教育実践の中で問題点を敏感かつ的確につかみつつ、自らの受けた通訳訓練を有効に活かして研究に取り組んでいる点は特筆に値する。今後の研鑽・研究によって更なる成果を出すよう期待するものである。

平成 29 年 2 月 6 日

主査 塚本 尋 杏林大学外国語学部教授

副査 塚本 慶一 杏林大学大学院国際協力研究科特任教授

副査 (外部審査)

邱 鳴 北京第二外国語大学副学長・教授
中国日本語教育学会副会長
中国通訳翻訳協会副会長

RONBUN SHU (XV)

CONTENTS

Articles

The Obstacles Caused by Intercultural Communication in Japanese - Chinese Interpretation

..... Wang Qian

An experimental study on the relationship of the speech rate of speakers and delivery ratio of students from risk averse perspective in simultaneous interpretation

..... Zhang Jing

杏林大学大学院国際協力研究科論文集 第15号

発行年月日 2018年3月31日

編集発行者 杏林大学大学院国際協力研究科長 大川 昌利

東京都三鷹市下連雀5-4-1

電話 0422(47)8000

印 刷 株式会社コムラ

〒501-2517 岐阜市三輪ぶりとぴあ3

Tel 058-229-5858

Fax 058-229-6001

